



前田 章  
科学技術振興機構

Akira MAEDA [正会員] akira.maeda@jst.go.jp

東京大学大学院物理学修士課程修了後、(株)日立製作所システム開発研究所入社。同社情報・通信システム社技師長などを経て現在は科学技術振興機構未来社会創造事業「超スマート社会の実現」領域の運営統括を務める。



[No.94]

## ITが社会を変える ～これまでも、これからも～

70年代の後半、大学の計算機センターの端末室でFORTRANの演習プログラムを作成したのが私にとって最初の計算機との出会いでした。とはいってもTSS端末で編集、バッチ投入、結果をラインプリンタで受け取るという形ですから、計算機に触ったという物理的な感覚はありません。専攻が理論物理だったこともあり、それ以上深くお付き合いすることは当時考えていませんでした。

転職となったのはシステム・ソフトウェアの研究所に就職することになってから。このときはIT業界の将来の発展を見込んで選んだわけではなく、物理に関係した仕事ができればいい、くらいの軽い気持ちで出した第一・第二希望に外れ、第三希望にとりあえず書いた研究所に配属されたのが実態でした(当時はジョブマッチングのような素敵な仕組みはなかったのだ)。

結果的にはこの配属が私にとって大変刺激と興奮に満ちた会社人生をもたらしてくれたわけで、当時の会社幹部の英断(?)には感謝するしかありません。

配属されて最初に仕事で使ったのが、制御用ミニコンピュータと呼ばれていた16ビットマシン。これを使った衛星画像処理システムの開発に従事しました。メインメモリ64キロワード、CPU性能は記憶が定かではありませんが、多分メガヘルツ程度のクロックですから、その能力は推して知るべし。外付けの大容量ハードディスク装置は腰の高さまである筐体で容量300メガバイト。そんな時代でした。

その後の半導体技術の急速の進歩は皆さんもご存じの通りで、計算機環境はミニコンからワークステーションやパソコンに移行していきます。

そして90年代、インターネットの大波が業界を襲います。私の仕事も画像処理技術から当時第2次

ブームだったAIや分散システム技術へと広がっていきました。この時代の変化の加速感は今振り返ってみてもものすごく、ITバブルなどという現象もありましたが、バックエンドシステムからオフィスなどのフロントエンドシステム、インターネット・モバイル、そしてスマホの普及でITが社会の変化を先導してきたのは、若い皆さんも経験されてきたことでしょう。

本稿を執筆するにあたり、改めて約40年の会社人生を振り返ってみて、大きな変化の時代を業界の内部から見てきたこと、ほんの一部であってもその変化にかかわることができたことは大変幸せだったと思います。

……と昔話だけでは終わらないのがITのすごいところ。今はIoTやAIなどの進歩がますます加速し、さまざまなイノベーションを起こしつつあります。これからの40年間は、過去40年間で起きたことよりも質的にまったく異なる変化を社会にもたらすでしょう。

「超スマート社会」「Society 5.0」というキーワードもそれを表しています。情報化社会=Society 4.0から次、どのような不連続変化が起きるのか、未来の社会はどうあるべきなのか、その実現に向けた最大の牽引力となるのはやはりITであるのは間違いがないでしょう。

特筆すべきなのは、ITに関しては、新しい技術と社会に与えるインパクトが直結していることです。今世界を席卷しているITサービス、ベンチャーの活躍などを見ても分かります。ITは若い人にとってワクワクする分野であり続けるのでしょう。本会の会員の活躍を期待します。

(2018年5月7日受付)